

当日の週報より

「毎年8月第一日曜日は平和聖日です。平和だとは言い切れない現在の様々な状況をしっかりと見つめ、懺悔すると同時に、神の平和の実現を確信しつつその器となるための思いを新たにするとしましょう。」

当日の礼拝で、「悔い改めの祈り」、「約束の祈り」を礼拝のなかで祈りました。

私は、自分を省みて、また終戦後の天皇崇拜から民主主義への人の転換の仕方を見たときに、人間の「弱さ」と「いいかげん」さを感じている一人です。

だから「不幸な過去を繰り返すことのないように、自覚するために」この祈りはとても大事だと感じました。以下参考までに日本のキリスト教が積極的に戦争に協力していった事例を、少し長くなりますが、高橋哲哉著「靖国問題」より抜粋します。

上智大学は、この事件(1932年「満州事変」の翌年、熱心なクリスチャンだった二人の上智大学生が、軍事教官に引率されて靖国神社遊就館の見学に行ったさい、参拝を拒んだ。それが新聞に書きたてられて大問題となり、この解決をはかるためカトリック東京教区ジャンボン大主教と文部省との間に交わされたやりとりで、神社や「招魂社:靖国神社」参拝を要求され、「敬礼」に加わることを求められるのは、「ひとえに愛国的意義を有するものにしてごうも宗教的意義を有するに非ざる」を明らかにした。)で存亡の危機に瀕したが、結局全面屈服と引き換えに危機を逃れた。学長以下全校謹慎したうえ、学長、神父、学生がこぞって靖国神社に参拝し、「忠君愛国の土を祀る神社に参拝することは、**国民としての公の義務**にかかわることであって、**各自の私的信仰**とは別個の事柄であることを了解」したと文部省に伝えたのである。…中略…宗教者は、神社参拝を「国民としての公の義務」として果たすかぎり、国家と対立せずにキリスト者や仏教者でありつづけることができる。まさにこのような関係のなかで、日本のキリスト教は1930年代以降、天皇と国家に忠誠を誓うことは信仰と矛盾しないとして、次第にむしろ積極的に戦争に協力していくことになる。

カトリック教会は、太平洋戦争中の1944年7月8日、「国民総決起運動」に協力するとして、伊勢神宮、明治神宮、そして靖国神社に教団代表者を参拝させた。伊勢神宮には松岡名古屋教区長をはじめ三名、明治神宮には土井東京大司教をはじめ三名、そして靖国神社には田口大阪司教をはじめ三名、「その他各教区においても代表者は靖国神社に参拝をなすこと」とされた。

プロテスタント教会は、1941年6月24日、34派が合同して日本基督教団を設立し、「我ら基督信者であると同時に日本臣民であり、皇国に忠誠を尽くすをもって第一とする」と宣誓文に明記した。翌年1月11日、日本基督教団統理の富田満は伊勢神宮に参拝し、天照大神に教団の発展を祈ることになる。